



TITLE:

# 第50回日本泌尿器科学会中部総会 シンポジウム 「泌尿器科腫瘍学に おける分子研究の展望」 一司会の 言葉一

AUTHOR(S):

出口, 隆; 小川, 修

---

CITATION:

出口, 隆 ...[et al]. 第50回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム 「泌尿器科腫瘍学における分子研究の展望」 一司会の言葉一. 泌尿器科紀要 2001, 47(11): 801-801

ISSUE DATE:

2001-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114643>

RIGHT:

## 第50回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム

## 「泌尿器科腫瘍学における分子研究の展望」

—司会の言葉—

岐阜大学

出口 隆

京都大学

小川 修

20世紀の後半は、科学の目覚ましい発展が遂げられた時期である。医学・生物学の領域においても同様であり、特に1953年にDNAの二重らせん構造が明らかになり、その50年後にはヒトゲノムの全塩基配列が解読されようとしている。21世紀の医学・生物学は解読された遺伝子の機能解析へと発展していくことは疑う余地がない。一方、当初は遺伝子操作、クローニング、塩基配列の決定など分子生物学研究の手法は、一部の分子生物学研究者の職人芸に負うところが大きかった。しかし、自動DNAシーケンサー、PCR法などの研究技術・手法の開発は、専門の基礎研究者のみならず臨床医にとっても分子生物学研究への参加を可能とした。21世紀は、われわれが日常診療の中で気づいた疑問点、問題点を遺伝子レベルで解決できる、しかもわれわれ自身もその解明のための研究に参加できる時代となるものと思われる。

泌尿器科腫瘍学研究においては、1980年代後半より分子生物学的なアプローチが盛んに行われてきた。発癌・転移機構の解明、遺伝子診断・遺伝子治療への応用、抗癌剤耐性機構の解明、分子疫学を応用した予防医学などに目覚ましい成果が挙げられてきた。それらの一部は実際の臨床の場で応用されているが、また、同時に遺伝子情報を扱う場合の社会的および倫理的な諸問題がクローズアップされている。

本シンポジウムは「泌尿器腫瘍における分子研究の展望」と題し、実際に研究を行っている若手の研究者にシンポジストになっていただいた。第50回日本泌尿器科学会中部総会は20世紀の最後の年に開催される学会であり、シンポジストの先生方には自らの研究成果と共に、日本における泌尿器科領域の分子生物学的研究の現状と問題点、さらに21世紀への「夢」を語っていただけるシンポジウムと考えた。

野々村祝夫先生（大阪大）、仲川嘉紀先生（奈良県

立医大）、越田 潔先生（金沢大）および秋田英俊先生（名古屋市立大）が、それぞれ精巣腫瘍、腎細胞癌、膀胱腫瘍および前立腺癌における発癌・転移機構について自らの研究成果と共に今後の研究の発展の可能性を示した。山本直樹先生（岐阜大）は、泌尿器科腫瘍の遺伝子診断全般のレビューと遺伝子診断の社会的および倫理面の問題を指摘した。後藤章暢先生（神戸大）は、遺伝子治療の今日までの成果をレビューし、今後の臨床応用への課題について述べた。賀本敏行先生（京都大）は、分子疫学研究成果を示し予防医学への発展の可能性を示唆した。

精力的に研究が行われている先生方の発表は、それぞれ素晴らしい成果の発表であり、総合討論においても泌尿器腫瘍の分子生物学研究の発展への明るい展望が予感された。21世紀はポストゲノムの時代であり、まさに、遺伝子機能解明の競争がスタートしたところである。分子生物学研究の成果が臨床医学の場に生かされるためには、臨床医の研究参加は不可欠である。しかしながら、総合討論では日本の臨床講座での臨床医が行う基礎研究について、臨床を行いながら基礎研究を続けなければならない、あるいは一時的に臨床を離れなければならないなどの継続的で精力的な研究を行うための困難さについての指摘があった。泌尿器腫瘍の分子生物学研究が日本で遅れをとらないためには、研究者の研究環境を整えるための臨床講座における研究形態の何らかの改革も今後の重要な課題であるのかもしれない。

最後に、シンポジストの先生方、シンポジウムを最後まで熱心にご静聴いただいた会場の先生方、このような有意義でタイムリーなシンポジウムを企画された藤田公生会長に謝意を表す

(Received on September 18, 2001)  
(Accepted on September 18, 2001)